

《Le vice-consul》における「自転車」のイメージ

川井扶佐子

〈序〉

マルグリット・デュラスの作品は、既に様々な角度から論じられている。中でも、複数の作品に登場する人物の関連性については、研究への食指が動かされるところであり、特に論じられるのは、「ロル・V・シュタイン」と「アンヌ＝マリー・ストレットル」という二人の女性である。この二人の主人公の重要性について、デュラス自身が対談などを通じて既に述べている。しかし、この主人公たちは、複数の作品に登場するとはいえ、完全に同一の主人公と見なすのは危険だといえよう。例えば、変奏曲のライトモチーフのようなものか、といえばそうとも言い切れぬ、かなり曖昧な存在の仕方ではあるが、どの作品においても、その「関連性」が重要な位置を占めていることは明らかである。

これらのことは、デュラスの作品生成の特質に起因すると考える。デュラスは、テキストの構成を綿密に計画する作家とはいえ、関連したテーマを有する作品を執筆するにしても、それ以前の作品内容を、はっきり覚えていない、と公言するような人物である。ほとんどの作品は、空白と暗示を多く含んでおり、作家の情熱の勢いに後押しされて書かれていく、ということだろうか。しかし、このことは反面、登場人物の重要性を、更にクローズアップすることにもなる。意図的に再登場させられたのではない登場人物は、作家デュラスの内在する創作意欲が、テキストへの再登場を促すのであり、それ程重要な女性達なのである。

本論においては、この重要な主人公のひとりである「アンヌ＝マリー・ストレットル」の登場する《Le vice-consul》に描写された、「自転車」という存在を分析することによって、実は巧みに重なり合い、作家によって仕組まれているイメージを発見し、テキストの細部を読み直すことを目的とする。

この作品は、これまでも多くの疑問と課題を投げかけてきた。特に、作品冒頭部分での、女乞食の運命や、彼女のたどった道程についての長々とした言及については、様々な研究や解釈がなされている。これも重要なテーマであるが、本論では、この作品に登場する「自転車」の示すイメージと、その位置を探ると同時に、デュラスのエクリチュールの特質に迫っていきたい。

デュラス作品を論じる上で、しばしば重要とされている「視線」の問題や、デュラス自身が映画監督をしていたという事実を考え合わせるならば、この作品に度々登場する「自転車」の存在に、重要な意味が付加されていると仮定することは、不可能ではない。実は、デュラス研究において、見逃しがちな表現の細部に、作品構成の核のようなものが隠されているのではないだろう

か。

本論の構成は、以下のとおりである。

〈1章〉では、《Le vice-consul》に登場する「アンヌ＝マリー・ストレットル」という女性像の確認作業。〈2章〉において、具体的に「自転車」のイメージを探っていく。

〈1章〉アンヌ＝マリー・ストレットルという女性像

「アンヌ＝マリー・ストレットル」という主人公について語る上で困難なことは、デュラスの作品に「アンヌ＝マリー・ストレットル」という名で登場する人物が、果たして、同一の視点で論じられるべきかどうか、という点であろう。

「アンヌ＝マリー・ストレットル」という名は、多くの作品に登場する。例えば、今回とり上げている《Le vice-consul》に始まり、その存在は小説を飛び越え、《La femme du Gange》というシナリオへ。更に、《India Song》という映画にまで領域を広げることになる。また、アンヌ＝マリー・ストレットルという名が最初に登場したのは、《Le ravissement de Lol V. Stein》においてである。

注意深くデュラスの作品を見るならば、アンヌ＝マリー・ストレットルという主人公は、いずれの作品においても、もう一人のパートナーと対をなして、作品の主人公となっていることが分かる。しかしながら、その存在感の大きさは、どの作品においても明白である。

《Le vice-consul》においては、そのタイトルが示す通り、アンヌ＝マリー・ストレットルのパートナーは、副領事ジャン＝マルク・ド・Hという人物である。物語は、貧困が蔓延する植民地であるインドのカルカッタを舞台として展開する。主人公であるラホール駐在フランス副領事ジャン＝マルク・ド・Hが、赴任地でハンセン病患者への突然の発砲事件など、数々のスキャンダラスな事件を起こし、当局から召還されてしまう。インドで処分を待つ間に会った、フランス大使夫人であるアンヌ＝マリー・ストレットルとの「愛」をめぐる物語は展開する。アンヌ＝マリーの取り巻きには、大使の招待客であるイギリスの若い作家ピーター・モーガン、《Le ravissement de Lol V. Stein》のマイケル・リチャードソンを彷彿とさせるマイケル・リチャード、着任早々の若い外交官補シャルル・ロセット、古くからの友人であるイギリスの実業家ジョージ・クラウンらが登場する。彼らは皆、アンヌ＝マリーの公然の愛人でもあるので、副領事の入る隙間はないように見える。また、この愛の物語の進行に平行して、女乞食の物語が展開するが、この話は、「ピーター・モーガンが書く」とされており、ある少女が妊娠したことで家を追われ、求められれば自分の体や、遂には自分の生んだ子までも売りながら暮らし、女乞食となりインドに渡ってくるまでの半生の物語である。この物語が、劇中劇なのか、あるいはアンヌ＝マリーと関連性のある物語なのかは、はっきりとしないまま進んでいく。女乞食のたどる道程は、インドシナ半島をトンレ・サップ湖の辺から、スタン・プルサット河の流れに沿って進み、プルサットの町へ。また、メコン河の支流に沿って、インドシナの〈鳥の平原〉へと向かうという雄大なスケールのものである。この長々とした女乞食の物語は、読者を驚かせるとともに、副領事の物語との関連性や構成上の問題等々、興味をそられるテーマではあるが、追究は次の機会に譲ることにしたい。

今回論じるテーマにおいて、アンヌ＝マリー・ストレットという女性、あるいはその女性像は、重要なポイントを占めていると思われるため、細部を検討する前に、アンヌ＝マリー像の確認をする必要がある。

デュラスは、『語る女たち』や、ミッシェル・ポルトとの対談において、アンヌ＝マリー・ストレットという人物像について言及している。¹⁾デュラスにとってのアンヌ＝マリーは、妻の鑑、模範的な母親という日常の領域と、愛人を持ち、青年を自殺に追いやるほどの危険性を孕み、情熱と死の領域を重ね持ち合わせた、ある意味での「女のモデル」だといえよう。

アンヌ＝マリーのモデルは、デュラスが仏領インドシナ時代に出会った、行政管理局長夫人であると、デュラス自身が認めている。一見慎み深い、二人の娘を持つ良き母であったその女性が、一方では若い男性を自殺に追い込んだという事件が原光景となり、それ以降、この美しい「二面性を兼ね備えた女性」の存在が、デュラスの心に深く刻まれることになる。

その後の幾つかの作品に「アンヌ＝マリー・ストレット」という名で登場する女性は、デュラスにとっての「女性の本質」であると、作家自身が言及している。作品を追うごとに「アンヌ＝マリー・ストレット」は存在感を増し、欲望に生きる部分と死に向かう部分の両義性を持つ、デュラスが創造した「女性の原型」となっていくのである。

《Le ravissement de Lol V. Stein》においても、この《Le vice-consul》においても、アンヌ＝マリーは、ダンスをする数分の中で、彼女に恋をした男性の本質を見抜き、その男性を虜にってしまう。しかし、マイケル・リチャードソンとのダンスの時とは違って、副領事とのダンスでは、魅入られたのは副領事の方ばかりではない。そこには、二人の持つ類似する「何か」が存在するからなのではなかろうか。アンヌ＝マリーは、インドに赴任する夫に従ってカルカッタに来て数年が経ち、どうにか土地に慣れたように見受けられる。しかし実は、永遠に続きそうに思われる暑さや、何事も起きない日常の緩慢さに耐えることができず、何度もフランスへ帰ろうと試みた過去を持つ。今は、生きる情熱を失い、ただ大使館邸周辺で、白人社会の中のみで生きているのである。しかしその反面、欲望は尽きることなく、彼女を取り巻く男性たちは、ほとんどが彼女の愛人である。一方、副領事は、多くを語ろうとはしない。ラホールでの発砲事件により、周囲の人々に敬遠される存在である。事件の真相や、彼の人となりも漠として明かされることはない。

さて、こうしてアンヌ＝マリー・ストレット像の要点をあげてみたが、次には、本来であれば単なる脇役でしかない「もの」に焦点をあてて、更に深くテキストを読んでいきたい。

デュラスは、この作品において、西洋人には慣れ親しむ事が困難なインドの気候を、あるいは、ハンセン病という、必要以上に人々に恐怖を与えてしまう病気を、社会的な一つの象徴として提示している。そうした外的状況に溶け込むために、本来の自分自身を失って生きていくことに解決を見出した副領事とアンヌ＝マリー。デュラスは、この二人の共通点の「証拠品」として、「自転車」を扱っているのではないだろうか。

アンヌ＝マリーと副領事の出会いの瞬間までに、「自転車」の存在が媒介となり、二人の距離を変化させる役目を担っていると仮定して、そうした観点から、次の章では、「自転車」の登場する場面を、具体的に検証してみる事にする。

〈2章〉「自転車」のイメージ

デュラス作品研究において重要なことの一つに、「視線」の問題がある。この問題を取り上げる研究者は多く、私自身も既に幾つかの点を指摘している。²⁾ 各作品に見られる「視線」は、はっきりとした誰かのもとと特定することが出来ない場合が多く、現に、この《Le vice-consul》においても、デュラスの独特な表現により、複数の不特定な「視線」が交差している。従って、語られている事柄が、誰によって確認されているのか、単なる噂話なのかの区別は曖昧である。その中であって、副領事の「視線」が、はっきりと捉えている、あるいは見つめている対象物に「自転車」があることに注目したい。

次に、具体的な箇所を引用し、「自転車」のイメージを分析していきたいと思う。(以下、引用部分において()等は筆者による)

- (i) 人気のないテニスコートを囲む柵に立てかけるようにして、女物の自転車が一台置いてある。これは、アンヌ＝マリー・ストレッチェルのものだ。(37)

この場面で、初めて「自転車」が登場する。語っているのはシャルル・ロセットであるが、前後の文脈から、「自転車」に向けられた視線は、副領事のものであると考えて良いだろう。この一節の前に、ノースリーブに白いショートパンツ姿のアンヌ＝マリーが、暑すぎる日差しの中で、帽子もかぶらずに娘達とテニスコートの方へと散歩する場面がある。副領事は、五週間前にカルカッタに来て以来、散歩するアンヌ＝マリーとすれ違うたび、会釈するだけで、まだ彼女と言葉を交わしてはいない。

この「自転車」の登場は、この時点では、まだ注目をひきつけるほどの存在感があるわけではない。単に、「人気のないテニスコート」や「ひどい暑さ」を強調する小道具としての役割でしかないようにも感じられるほどであり、アンヌ＝マリーの所有物であるという点が僅かに注意を引くのみである。こうして静かに「自転車」は、初めて場面に登場することになる。

- (ii) ①テニスコートを囲む柵に立てかけてある、女物の自転車が、一台ある。(49)

②柵に立てかけた自転車は、散歩道の灰色の埃をうっすらと被っている。それは、見捨てられ、使われず、不気味である。(49)

この①と②の間で、副領事が「自転車」に「何か」をしている姿が、着任早々の若い外交官補であるシャルル・ロセットに目撃される。従って、ここにはシャルル・ロセットが、副領事を遠くから見ている視線がある。しかし、遠くて細部が見てとれない状況であり、この時ロセットは、「自転車」の存在すら意識していない。副領事は、「自転車」を見つめ、手を触れ、長い間「自転車」に身をかがめ、体を起こして、また見つめている。副領事の行動をフェティシスト的要素として見る研究者は多いが、それだけでこの場面を片付けてしまってもよいのだろうか。確かに、

「自転車」の所有者がアンヌ＝マリーであると明言されているため、サドルやハンドルなど、彼女の体の一部が触れたであろう部分は、副領事の興味を引く対象となる。しかし、ただそれだけの為に、「自転車」が再登場しているのだろうか。②の文で印象に残るのは「不気味な」(effrayante) という語である。(i) と (ii) ①は、ほぼ同じような文章であるのに対し、(ii) ②の文が付加されたことにより、「自転車」に「不気味な」イメージを絡ませる。

この①、②の数ページ前に、以下のような箇所が見られる。

ムッシュはお茶を召し上がりますか？ 私達はバラ色をした女性を夢に見た。バラ色の、本を読むバラ色の女性。遙か英仏海峡からの刺すような風の中で、ブルーストを読んでいる女性の。ムッシュはお茶を召し上がりますか？ それともご病気ですか？ (47)

「ムッシュ」とは、シャルル・ロセットを示す。インドの酷暑に耐えられず、夜も眠ることができないロセットが、昼のまどろみの中で、夢うつつに奉公人たちの声を聞いている場面である。すなわち「私達」である奉公人が、午後の紅茶を持っていかどうかを、主人であるロセットに尋ねている場面である。

赴任早々で、インドの気候に慣れないシャルル・ロセットが、午後に習慣となってしまったシエスタの場面で、インド人の奉公人達の話している声が聞こえるような場面である。

ここでも、デュラス独特の文体は、文章を宙吊りのまま放置するような形で、読者に差し出されており、「私達」である奉公人が夢を見たのか、あるいは、ロセットが、夢の中で奉公人たちの声を聞いているのか判然としない。

ここで着目したいのは、私達の目に飛び込んでくる「お茶」や「バラ色」という言葉である。この時点で感じられたある種の予感が、「ブルースト」という語によって、色彩を豊かにする。なぜならば、作品全体を通して流れる「曖昧さ」の中であって、ここで見られるような直接的なイメージの喚起は、大きな効力を発揮するからだ。

例えば、「お茶」によって「マドレーヌの挿話」を、「バラ色」によって「オデットの着ていた衣装」を、「英仏海峡」によって「バルベック」のイメージを与えると考えすることは不可能ではない。あまりに直接すぎる隠喩であるため見逃しがちではあるが、これらの表現が、アンヌ＝マリーの「自転車」のイメージを探る上での、一つのヒントととらえることはできるだろう。

(i) の段階で、「自転車」の所有者がアンヌ＝マリーであると分かった時点から、副領事にとって、「自転車」は更に特別の存在となっていく。彼女にひと目会ったときから、副領事は生まれて初めて他人を好きになるわけだが、(それまでは、自分自身以外の人を愛した事がないと記されている³⁾) 彼女に近づく手段を知らない副領事は、「自転車」を通して、彼女との交流を図ろうと試みる。もはや、副領事にとって「自転車」という存在は、物質的な枠を超えたものとなっているのかもしれない。

加えて、最初の段階で与えられた「ブルースト」との類似性の提示は、アンヌ＝マリーを「アルベルチヌ」との結びつきにまで発展させていると考えることもできるだろう。ここで、誰もが気づくのは、「自転車」の位置である。アルベルチヌや、そのグループの若い娘たちが、バルベックの浜辺で「自転車」を引きながら散歩する姿を、私たちは思い出さずにはいられない。

ここに登場するアンヌ＝マリーの「自転車」は、かつて、その所有者に、快活な散歩を提供するために役に立ったときもあったのだ。快活な少女の姿と、いずれ闇の部分を持つ女性となる二重の意味合いを併せ持つアルベルチヌの存在は、「自転車」を通じて、アンヌ＝マリーのイメージさえも増幅させる手助けとなる。

さて、インドに来る前のアンヌ＝マリーの生い立ちは次のようなものである。彼女は、フランス人の父親とヴェネチア出身の母親を持ち、若いときには一流のピアニストとしても活躍をしていた。フランスの行政官と結婚するものの、ラオスの小さな町に赴任した際に、ストレット氏に出会い、彼に連れ去られて妻となる。それからは、夫の任地について、アジアの国々を転々とした後、今は在インドのフランス大使夫人となっているのである。インドの気候や習慣、更に退屈な日々の生活に耐えられず、フランスへの帰国を願った時もあったが、それから数年を経て、今は、愛人たちへの肉体的な奉仕と、乞食やハンセン病患者たちへの水や食料の奉仕だけで生きている状態である。従って、アンヌ＝マリーは、昔のように自由に、自分のために活発に生きているわけではない。インドの耐えられない気候と、植民地に生活する官僚たち特有の、暇をもてあます生活、何もない何もすることのない生活のために、今は死んだように生きている女性である。⁴⁾

(iii) 自転車はずっとそこに置いてあったんだ。テニスコートの柵に立てかけられて。彼女はそれに乗って、並木道の方へといってしまったんだ。と、副領事は続けた。(80)

ここで「自転車」について語っているのは副領事である。

アンヌ＝マリーのいなくなったテニスコートは、さびれていて、空気まで引き裂かれているように、副領事には感じられる。

アンヌ＝マリーの周辺を彩る、「ブルースト」の印象を浸透させるような幾つかの言葉が、彼女を更に神秘的に彩り、デュラスの文体とあいまって、真実の彼女をひた隠すことに成功する。この作品を、全体を通して見てみても、全ての登場人物に対する情報は、曖昧であり噂話の域をでない。小説全体が曖昧模糊とした中であって、この「自転車」の存在だけが、異彩を放っているのである。それは、この物体は、確かに存在しているからである。それは、アンヌ＝マリーの存在証明であるとも考えられないか。

だから、彼女と直接的な交流がないにもかかわらず、副領事は「彼女を悲しみによって奪い取ろう」(80)と考えている。しかしそれができないとしたら、

物に関わることはできるだろう。彼女が触れた木、自転車にも(80)

と、ほとんど眠ってしまっているクラブの支配人相手に、告白する。このあたりでも、デュラスは意図的に、主人公の感情をはっきりと表現することを避けているため、事態の核心部分は闇の中である。

「自転車」が、繰り返えし登場することによって、既に「自転車」はアンヌ＝マリーを喚起させる存在となっている。(ii) ②で暗示された「不気味な」イメージは、ある種のフェティシス

ト的な副領事の「自転車」への接近と執着に重なり合うことで、実は副領事もイメージを隣接している。また、「自転車」は、アンヌ＝マリー・ストレットルの、もう一つの姿としてのイメージを定着させていく。それは、いわば「生きていた」頃のアンヌ＝マリーの残骸としての証明である。今はインドの地で、あらゆる意味での奉仕に身を委ねて、あたかも死んだかのように生きているアンヌ＝マリーが、自分のために「生きていた」頃の証として「自転車」は登場するといえるだろう。

(iv) 自転車はそこにある、あの女性に見棄てられて、23日前から。(83)

この文で注目するのは「23日前」という具体的な日数の提示である。デュラスは、ところどころに、こうした具体性を記述することで、読者に不意打ちをくらわせる。

この「自転車」について、支配人は、夏のモンスーンのせいで忘れられているだけなのだと、副領事は深く考えすぎだといわんばかりに、この話題を軽く扱うのに対し、副領事は「そういうことではないのだ」(80)と答えて、押し黙ってしまう。副領事にとっては、最も重要な事柄なのだ。

デュラス作品の特徴の一つとして、会話が暗示的な形で終わってしまうことが上げられる。そういう意味で、この二人の会話を分析することは、あくまでも推測の域をでないところであるが、「自転車」の放棄は、自分自身のために「生きること」の放棄とも受けとることができるのではないか。それを理解するのは、副領事のみである。何故ならば、副領事自身も、「ラホール的一件」をきっかけとして、自分自身の生活を放棄した人物であるからだ。

デュラスの文体においては、提示された語が微妙に揺れ動き、言葉に内在する意味の広がり大きい。そのため、「アンヌ＝マリー・ストレットル」という存在は、デュラス作品のなかで、同一人物として描かれているのではなく、ライトモチーフでないにもかかわらず、各作品で反復されるごとに、結果としてイメージを増幅していくことになる。そして、この《*Le vice-concul*》では、デュラスはアンヌ＝マリーに「過去」を与え、そのイメージを「自転車」と結びつけ、遠くに「ブルースト」の影をちらつかせることで効果をもたらしている。

次の「自転車」の登場では、少々シチュエーションに違いが見られる。シャルル・ロセットが副領事の様子を見ているときに、

(v) 自転車は柵にたてかけられて、今朝もまだそこにあった。(101)

と、描写される。ここからは、「自転車」のそばに副領事がないことに加えて、ロセットが「自転車」の存在を、はっきりと意識しはじめている。

その後、フランス大使に、彼と少し話をするようにと言われていたことを思い出し、シャルル・ロセットは、副領事に声をかける。短い会話の後、

(vi) それは、彼（副領事）が、今度は自分で、自転車に近づき、ロセットの姿を見失ってしまったはず

と後になってのことだった。彼は、《インディアナ・ソング》の古い一節を口笛で吹きはじめたのだ。その時、恐怖は最も大きくなり、ロセットは事務所の方へ向かって、急いで歩きはじめたのだった。
(102)

ここでの「恐怖 (la peur)」には、(ii) ②での「不気味な (effrayante)」との呼応があると考えることができる。上記引用文においても、彼《il》や、直接目的代名詞《le》などの記述により、「彼」という存在が、副領事であるのかロセットであるのか、漠然としているのが目につく。しかしながら、注目すべきは、ロセットが、ある種の恐怖を感じはじめたということにある。「自転車」の存在を意識しはじめたロセットが、「自転車」に近づく副領事を意識的に見た時、それ以前とは違って、そこには「恐怖」が生まれたのである。

それまで遠くから、ちらりと見ていただけのシャルル・ロセットが、「自転車」を見る副領事を背後から見るというシチュエーションが、このあたりから登場する。デュラス作品における「視線」の重要性については既に指摘しているが、「自転車」を見る「視線」の交代や重複は重要な点である。「自転車」は、同じ場所で存在しながら、「視線」の交代により、その役割を変化させたと考えることができるのではないだろうか。

こうして断片的に、少しずつ登場人物の情報が提供されていく中で、副領事は一貫してアンヌ＝マリーへの興味を示していると共に、アンヌ＝マリー自身も、それを拒んでいるわけではない。後のダンスの場面で、誰にも理解されない副領事に対してアンヌ＝マリーは、「少しわかります。ほんの少しだけ」(127) と、副領事のわかりにくい現状に理解を示す言葉を発する。ダンスの終わり間際には、二人でできることはなにもなく、副領事に「必要なことはなにもない」(128) と、アンヌ＝マリーは確信をもって断言するのである。

この場面においても、デュラスの曖昧なシチュエーションが、二人の感情をオブラートに包んでいるが、ここで暗示されるのは、少なくとも二人の間には、何らかの共感があるということだ。アンヌ＝マリーの苦悩と、副領事の怒りとの間には、通じあう何かが存在するのではないだろうか。しかし、苦悩を中心として、アンヌ＝マリーは、それに身を委ねるのに対し、副領事にはそれが出来ない。というのも、アンヌ＝マリーには、欲望だけは残されているが、彼の方は、ほとんど生命力を持っていない、実質が空っぽになった存在だからだ。

こうして、シャルル・ロセットにも見られる存在となった「自転車」は、アンヌ＝マリーを喚起すると共に、その傍に寄り添う副領事の影を重ね合わせて、イメージを作り上げていく。

実際、副領事がアンヌ＝マリーと会話し、互いの気持ちを確認し合うのは、上記の場面のずっと後になるが、「自転車」は今後の二人の関係を予見する存在であるのかもしれない。

(vii) 副領事は笑い、目を伏せて、バーの方へと歩いていった。さびれたテニスコート辺りにある、女性の自転車を忘れること、あるいは逃げ出すこと。それは視線をというよりも、むしろ声の方をということだ、とシャルル・ロセットは思った。(103)

上記の引用文も、解釈が困難な一文である。しかし、例えば、「自転車を忘れること」を「アンヌ＝マリーを、あるいは副領事をわすれること」、「逃げ出すこと」を「インドから出ること」

と置き換えることができるだろう。また、これまでに取り上げていない点ではあるが、この作品において、副領事の「声」について、「移植されたみたいに感じの悪い声」「他人みたいな声」という表現があり、副領事の人となり語る上で、「声」は印象深い、重要な部分となっていることを付け加えておく必要があるだろう。

さて、論を本題に戻すと、既に、シャルル・ロセットにとっての「自転車」は、副領事を喚起させる存在と化している。ロセットは、常に「自転車」を見ている副領事を見ているからだ。副領事が、あまりにも「自転車」にこだわることに、ロセットは疑問を抱かずにはいられない。何故なら、周囲の人々は、アンヌ＝マリーと副領事との間の共鳴する何かには、全く気づくことはないからだ。

しかしロセットも、この「女物の自転車」が、誰のものであるか気づくことになる。その時、ロセットの「視線」を通じて、「自転車」のイメージの二重化がテキストに刻み込まれていく。

(viii) その時、はじめて、シャルル・ロセットは思い出した。時々、朝の早いうちに、ストレッテル夫人が大使館の庭園で自転車にのっていたことを。最近になって、そうしている姿を見なくなっていたのは、夏のモンスーンの間には、そんなことはできないという理由にすぎないだろう。

(105)

「自転車」がアンヌ＝マリーの所有するものであると知った時、シャルル・ロセットの胸には疑問が湧き上がる。アンヌ＝マリーが、「自転車」を置き去りにしている理由は何なのか。ロセットは、モンスーンのせいだと思いたい。この作品を通じて感じられるのは、先に何度も述べている通り、何人も、はっきりとした事柄を話そうとせず、真相を見出すことができないということだ。それに加えて、植民地の支配階級の人々が、よそ者である上に、決して「インド」という土地に馴染むことができないという現実には、無視できない状況設定である。「自転車」に乗って、大使館の庭園やテニスコートを颯爽と走り抜けていたアンヌ＝マリーにしても、とうとう「インド」に融合することへの限界がやってくるのである。乗り捨てられた「自転車」は、何と云ってする事がないという外的状況に加え、日常生活の放棄という二重の否定的状態を意味しているのではないか。

インドの生活に溶け込むことのできないアンヌ＝マリーの行動範囲は、極端に狭いものであり、ほとんどが白人社会の中でのパーティーでしかない。従って、「自転車」を置き去りにしたとしても、あるいは意図的に置いてあるにしても、誰一人として注意を払うものはないし、そのこと自体が忘れられてしまうのだ。

(ix) 彼女(アンヌ＝マリー・ストレッテル)はカルカッタでは何も、誰も知らない。多分、大使館庭園の庭師達が何かに気づいただろうが、ただそれだけだ。彼らは決して、何も言わないだろう。彼女は、あの自転車を忘れたにちがいないし、夏のモンスーンの間は使わないのだ。(108)

ロセットの見解にも不安の影が見えてくる。「自転車」の放棄は、モンスーンのせいだけではないことに、ロセットも気づきはじめているのだ。ロセットが、他の取り巻きよりも敏感なのは、

(80)

この時点で、彼自身が、まだアンヌ＝マリーの愛人の仲間入りができるかどうかの不安定な段階にいることと、やはり「インド」の土地にまだ慣れることが出来ずにいること。そして、副領事の起こしたラホールでの事件の事を知らないでいることにある。ロセットの目には、アンヌ＝マリーと副領事の間に通う「情」のようなものが見えてきたのかもしれない。

デュラスは、作品中にカップルを登場させる場合、そのカップルの目撃者をしばしば登場させて、ある種の三角関係を作り出すことがある。例えば、《Le ravissement de Lol V. Stein》の場合では、アンヌ＝マリー・ストレットとマイケル・リチャードソンとのダンスの場面で、主人公のロル・V・シュタインが目撃者となっている。今作品においては、ロセットは、ある意味での目撃者の役を担っている。目撃者ロセットが、「自転車」が置き去りにされている理由を、ありきたりの原因で片付けようとすればするほど、「自転車」に照明が当てられることとなり、イメージの増幅に一役買うことになるのだ。

- (x) アンヌ＝マリー・ストレットとのダンス中にも関わらず、シャルル・ロセットは思いをはせる。さびれたテニスコート辺りで彼が見たことは、彼でない他の誰かには、知られていることなのだ。夏のモンスーンの明け方の薄光の中で、他の誰かが、さびれたテニスコート近くで見ていたにちがいない。ちょうどその時副領事が通り過ぎて行ったのだ。今黙っている誰か、多分、彼女だ。

(115)

この段階で「自転車」が登場しないのは興味深い。「自転車」の不在は、これまでの分析を通して考えてみると、納得がいくのではないか。「彼女」というのは、アンヌ＝マリー・ストレットを示すと仮定してみよう。彼、シャルル・ロセットが見たこととは、恐らく副領事が「自転車」を眺めたり、触れたりしたことであろう。以上の仮定を踏まえて、更に予測できるのは、「自転車」を眺める副領事を見ていたのは、シャルル・ロセットだけではなく、アンヌ＝マリー・ストレット自身が、彼よりも前にその光景を見ていたかもしれないということだ。ここで、「アンヌ＝マリー・ストレット」自身が登場するのであれば、彼女の分身ともいえる「自転車」の役目はないわけである。またこのことで、「自転車」が置き去りにされていたのは、アンヌ＝マリーが忘れていたわけでもないし、モンスーンのせいでもなく、副領事のためであるかもしれないという暗示すら与える事に成功している。

そして、この場面以降、「自転車」はテキストの中からすっかりと姿を消してしまう。しかしその代わりに、副領事は、招待されたレセプションにおいて、アンヌ＝マリーと直接会話をし、ダンスをする事になる。前にも述べたように、そこで二人は互いの類似性に気づくことになるのだ。

〈展望〉

本作品においては、「自転車」に注目してテキストを読むことにこだわってきたが、実は分析した箇所は、テキスト全体の三分の一の部分でしかないことを断っておきたい。前述した通り、その他の部分には、前半に女乞食の登場する物語があり、その後の二人の展開は、副領事とアン

ヌ＝マリーによる運命のダンスの後、副領事は皆に拒絶されたままとり残され、アンヌ＝マリーと、その取り巻きたちは、《島》へ渡り、そこに建てられている大使の別荘と「ホテル・プリンス・オブ・ウェールズ」に舞台を移し、物語が続いていくことになる。

デュラスの提示する、「もの」の存在の重要性の一端に触れた今、本論でページを割くことのできなかつた部分を次に分析することによって、更には、本作品全体に点在する「もの」による重層構造を見出すことができるだろう。

今後は、ブルーストの影を視野に入れつつ、テキスト全体を把握することが、内在すると予測される循環する「もの」の存在を発見する糸口となるのではないかと考え、今後の緊急な研究課題としていきたいと考えている。

註

Maruguerite Duras, *Le vice-consul*, Paris, Gallimard, 1966. の引用については、() に出展箇所のページ数のみを記入した。

- 1) マルグリット・デュラス グザビエル・ゴーチェ『語る女たち』, 田中倫郎訳 (河出書房新書 1975年), p198.
- 2) 言語・文学研究論集 第3号「マルグリット・デュラスの「視線」—『ロル・V・シュタインの歓喜』をめぐって—」を参照のこと。
- 3) *Le vice-consul*, p77.
- 4) 『語る女たち』, pp251-252.

参考文献：赤羽研三「言葉と意味を考える I 隠喩のイメージ」(夏目書房 1998年)